

第七章 産 業

第一節 農 業

第一項 藩政時代の農業

古より士農工商、農は國の基など、重んぜられて來た農業、神聖なる勞働を以て收入の根本としてゐた農業は、藩政時代には商工業者の上に立つて重んぜられてゐた。それ故町人よりも凡ての点に於て保護せられ獎勵もせられ、甚だしきは農業を救済するために商業の發展さへも顧られないやうなこともあつた。併しそれは一時の状態で、世の生活程度の上は農民の奢侈となり、又尾張藩の施政は地方小藩に影響し、徴税の苛酷となり徴税の苛酷は農業の疲弊となり、この疲弊は小農以下のものが影を没して大農に併合せられ、家は破れ田畑を失つた農民は生れ故郷を後にして町へ、都會へ、町奉公といつて遂に市中に移住するに至つた。これが即ち文化以前の農村の状態であつた。

翻つて吾が大口村の状況を見れば、元來尾張平野の東北部に發達した農村であるから、農を以て主業とするのは勿論である。

然し耕地は比較的畑が少く、田は總べて稻作を主としてゐた。土地の面積は人口の割合に狭小で土地利用については研究の必要多く、次第に副業としての養蠶發達し、畑は勿論田までに栽桑を試みるに至つた。

明治八年御改正ノ反別ト貢租

大字名	田反別	畑反別	宅地反別	合 計	貢 租	村		宅 位
						田	畑	
小 口	一九七、〇九	八五、三三	二四、七六	三〇七、一八	二四〇九 ^門	乙ノ一一	一四	乙ノ八
河 北	八四、三七	四、六四	六、六〇	九五、六一	七六一	乙ノ一三	一八	九
余 野	一六、二〇	五五、八一	六、七一	七八、七二	七六八	一三	一四	不詳
大 屋 敷	七二、一三	三三、四四	九、九〇	一一四、一七	二二二四	六	一〇	八
豊 田	九八、一五	五六、五二	一四、四六	一六九、一三	一七七〇	乙ノ七	乙ノ一一	八
秋 田	二一、五三	八一、〇三	九、八二	一一二、三八	九九八	乙ノ一〇	一三	乙ノ八
外 坪	五一、三六	一〇、五一	五、三一	六七、一八	九〇八	九	一二	乙ノ八
合 計	五四〇、八三	三二六、二八	七七、五六	九四四、六七	九七三八			

豊田、秋田ハ村位ノ相違以上ニ貢租ノ差甚シキモ其ノ理由不明

第二項 現代の農業

本村の耕地は田が七百二十三町歩余、畑が三百四十四町歩餘、それに對して戸數千三百二十七戸、人口七千三百二十五人であつて、内三百戸は農業以外を業としてゐる。故に一戸當りの耕地面積は一町歩となり相當の面積であるが、實際に耕作に従事してゐるのはこれ程でなく、他町村より耕作に入り込むものが可成多數ある状態である。

本村の如き田の割合に多い土地に於ては、繁閑の差格別甚だしく冬期水田裏作に就いて研究するは勿論肝要なる問題なれど、それと共に冬期農閑期利用のため適當の副業を研究することは最も必要欠くべからざる点である。

本村に於ては各字別により各々事情を異にし、副業の種類も亦多種多様である。近時畜産の發達を促進し、養豚、養雞、養蜂、養兔等漸次増加の傾向にあつて、農家の副業として適當なものである。

左に本村の農家戸數 田畑反別 産額等を表記する。

一、農家戸數

昭和八年十二月調

種別	戸數
専業農家	一〇七〇
兼業農家	一四六

二、自小作別 農家戸數

昭和八年十二月調

種別	戸數	種別	戸數
地主主	八	小作	四二八
地主兼自作	二四六	其他	一四六
自作	六九	合計	一二一六
自作兼小作	三一九		

三、農家戸數ノ増減

昭和八年十二月調

種別	年次	戸數	年次	戸數	年次	戸數
専業	昭和六年	一〇三五	昭和七年	一〇六四	昭和八年	一〇七〇
兼業	全	一九六	全	一五二	全	一四六

四、耕地反別

昭和五年

大字名	總面積		自作地		小作地	
	自作地	小作地	自作地	小作地	自作地	小作地
秋田	一二九・四五	三七・四三	三九・九七	二六・七七	二五・二七	
豐田	一六八・八一	四七・五〇	五九・五四	三六・四四	二五・三一	
大敷	一一八・三八	三一・九七	四一・七六	二三・九六	二〇・六七	
外坪	六六・五四	三三・一三	三三・四一	八・四七	七・七五	
河野	一一三・八四	四五・一一	五〇・九八	九・一〇	八・六三	
余野	七八・三六	八・三三	八・六一	三四・一〇	二七・三一	
上野	一二六・六三	二八・一〇	六七・八九	一四・三五	一七・二七	
中野	一三〇・七八	三四・三〇	六四・四七	一五・四三	一六・五七	
下野	一六七・七一	三六・六三	六二・二六	三一・三九	三七・四二	
全野	一一〇〇・五二	二九四・〇八	四二一・一九	二〇〇・〇三	一八五・二二	

五、各種農産物栽培反別及收量

昭和八年十二月

種別	作付反別	收穫	高	價	格
----	------	----	---	---	---

米	大麦	小麥	裸麥	大豆	粟	黍	大根	甘藷	馬薯	大芋	里芋	人參	牛蒡
六七九・四	三三六・〇	一四三・二	三七・六	七・六	・六	一・二	一・四	五九・一	七・八	一〇・六	一八・六	五・二	一・六
一六、七六二	五、一五〇	一、八一〇	五六〇	一一〇	五	一九	二一	四七八	三五、一〇〇	四二、四〇〇	一六九、五〇〇	一九、七六〇	四、〇〇〇
三六一、七八五	三六、〇五〇	二七、一五〇	五、六〇〇	一、五四〇	六五	二二八	三一八	二五、八六〇	三、五一〇	四、二四〇	二、七九〇	一、一八五	四八〇

九、養蠶收入調

昭和八年十二月

金額	人	金額	人	金額	人
千圓以上	〇	五百圓以上	〇	百圓以上	六
五十圓以上	一三	三十圓以上	二七	二十圓以上	六一
十五圓以上	六一	十圓以上	一五〇	七圓以上	二七
五圓以上	七〇	三圓以上	一三五	二圓以上	一四六
一圓以上	四七二	五十錢以上	三六四	二十錢以上	一三六
二十錢未滿	一〇一	合計	一八六九人		

八、地租納稅者

昭和八年二月十七日現在

最高	普通	最低	最高	普通	最低
一・四石	・九石	・五石	一・二石	・七石	・三石
田	田	田	畑	畑	畑

七、段當貸賃價格

山林	宅地	耕地		
		畑	田	田
林	籾	点在部	集團部	畑
四〇〇	八〇〇	一二〇〇	二〇〇〇	一四〇〇
二五〇	六〇〇	九二〇	一四〇〇	八四〇
一〇〇	四〇〇	六五〇	八〇〇	二九〇

六、土地價格(地價)表

昭和八年二月現在

紫萵英	茶葉	胡椒	蕪菁	菜種
三五・一	・八	一・七	一・三	一七・九
九八五二四六	四二五	三、九一〇	三、五一〇	一八八石
九八六〇	二三五	三九一	一〇五	三、一九六

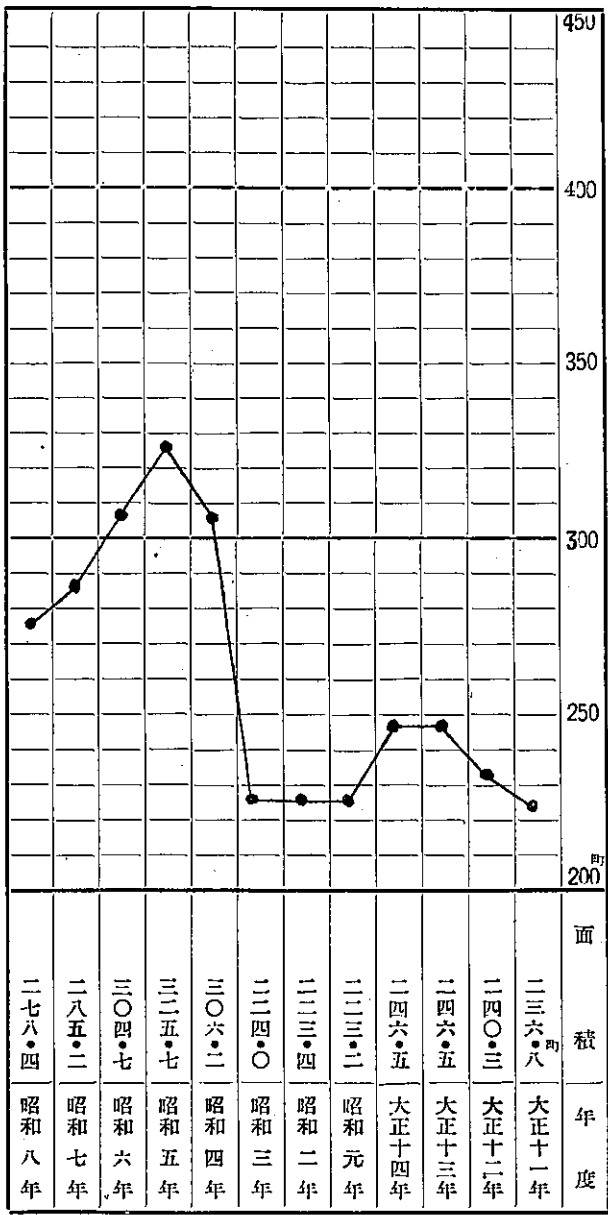
種 項	飼育戸數				掃立枚數		收 繭 量	價 格	單 價
	計	晚 秋	秋	夏	白	黃			
計	一、八七四	九三七	九三七	一、八八四 _円	二〇、二九〇	一、一三、〇五二 _円	四三、〇三〇	六、〇〇	
晚秋	一、八七四	九三七	九三七	一、八七、九九九	二〇、二九〇	一、一三、〇五二 _円	四三、〇三〇	六、〇〇	
秋		九三七	九三七	一、一五、三三九 _g	四、五、五七一	一、九五、四九九		六、〇〇	
夏									
春									

一〇、桑ノ作付反別

昭和八年十二月

區 別	本 地		其 他		其 他		計
	計	中 刈	計	中 刈	計	中 刈	
計	二二九・四	二二・三・八	三〇・八	三九・六	六・二	五・一	二七六・四
根 刈	一一五・六 _町	一一・二 _町	一一・二 _町	一一・二 _町	一一・二 _町	一一・二 _町	一七・九 _町
中 刈	一一一・八	一一一・八	一九・〇	二八・四	一九・〇	一九・〇	二五八・五

第三項 田 (稻作)



本村耕地の七割を占むる田は木津用水、入鹿用水の開発と共に灌漑排水の便よく、乾田として二毛作を行つてゐる。稲作の改良も近時發達し其の收量も漸次増加の傾向にある。品種も農事試験場に於て奨励せらるゝもの、中、本村の氣候土質に適するものを選出され收量品質共に向上中である。本村に栽培せらるゝ品種中京都旭、愛知旭、千本旭、早生旭、豊年旭、旭糯等は有望品種に屬し將來原種の拂下により改良せば本村稲作上大の進歩を期待することが出来る。

乾田としての裏作利用も近時よく發達し殆んど二毛作を行はない耕地はない状態である。現在栽培されつゝある裏作物物の主なるものは、大小麥の外、大根種子、紫莖英種子、莖莖、馬鈴薯等である。然しながら之等の栽培技術の向上と販賣法の改善は尙幾多の研究の餘地を有すると思はる。尙有利な水田裏作物は多種多様で將來此の收益増加を計り農家の全収入を多くする道を講ずることは本村にとつては適切な仕事である。

第四項 種 苗 業

近時養蠶業の發達普及と共に桑苗の需要増加に随つて之が栽培も増加し、桑苗を業とするものもあるに至つた。現在に於ては畑は勿論、水田を以て桑木栽培をなす所謂「たつぶし」なるもの、現出せる状態である。その生産高も二百五十九万本に達し、その價格一萬圓を越ゆる有様である。これ等の桑苗は多く岐阜縣、關西、中國の各地方迄移出されてゐる。併し之れも養蠶業不況の影響をうけて今は全く行詰まりの体となつてゐる。

桑苗の外山林用苗も多少栽培され、その數も二十二万本約千圓に達してゐる。

第五項 畜 産 業

本村に於ける畜産業は未だ盛んであるといふことは出来ない。これ本村が從來の習慣として、餘り家畜を飼養しなかつたと、今一つは夏季稲作養蠶等の繁忙期にその手入れ不行届となり不良の結果を見るを恐れての結果である。併し時勢の進歩に伴ひ、或は農耕の變化につれて或は副業とし或は自給肥料の必要に迫られ又不況の影響を受けて盛になりつゝある。

本村に於ける畜産について見るに馬は挽馬として僅かに存する程度であり、牛も牛乳商として數頭を飼養してゐるに過ぎない。

豚は近時肉の需要盛んなるに従ひ、又厩肥を必要とする上より、近來急速に發達をなし、何れの字にも豚を飼養せざるはなく各字に養豚組合を組織するもの多く、その數四百六十餘頭に及び、尙將來益々増加の傾向にある。

養雞は古くから行はれてゐるが、卵肉の需要が少かつたために一家に多くて數羽を飼養する位であつたが、明治初年以來人口増加に伴ひ、且生活程度の向上或は營養價値の大なるため等により、漸次増加して農家の副業として盛んに飼養するに至つた。各字には養雞組合あり。種雞の購入、飼料の購入、母雞産卵の販賣出荷等共同的活動により利益増進研究等に力めつゝある。

飼育品種は名古屋種最も多くレグホーンこれに次ぐ。

一、家畜数調

年次	頭数	牛		馬	
		数量	價格	頭数	頭数
昭和二年	牝牡 四二	四七 ^五	三、二九〇 ^四	二六	二八〇
全三年	牝牡 五二	四六	二、七六〇	二五	三五七
全四年	牝牡 三一	四七	二、五八五	二二	三七七
全五年	牝牡 三三	四九	二、四五〇	一二	四三九
全六年	牝牡 三四	四六	二、三〇〇	一一	五七五

二、養雞羽數及戸數調

昭和七年八月

年次	十羽以上	五十羽以上	百羽以上	羽數合計	價格
大正十二年	三七七	一七	二六	三〇、二七〇	五二、〇八七 ^四

第二節 工業

本村は往昔より農業及養蠶業を本業とする村で、古くから農業によく勉強し又蠶を飼つて副業となし、一村經濟の基をなして來た。かくの如く古より現今に至る迄農業を主業としたから随つて工業の發達は微々たるものであつた。

年次	全十三年	全十四年	昭和元年	全二年	全三年	全四年	全五年	全六年	全七年
頭数	三六九	三七〇	四五〇	二七五	二九三	三三八	四一八	四三九	四五七
數量	二二	二一	一八	六二	六八	一三九	一四一	一六〇	一五六
價格	二八	三〇	一七	四九	五三	一八	二五	四八	四八
頭數合計	三一、二九七	三二、〇〇〇	四二、二〇〇	三九、三七六	四四、五六四	三四、九六九	三五、九三〇	二三、〇六七	二二、九〇五
價格	四九、五七四	五二、九〇〇	一一七、二四〇	五一、四六七	一〇〇、六七三	三九、九五〇	三七、〇五四	二五、二九五	二三、〇八四